

浄

monthly
JODO
1997.1

土



1997
1
January

テレコムしよう。



コミュニケーションの未来へ
日本テレコム

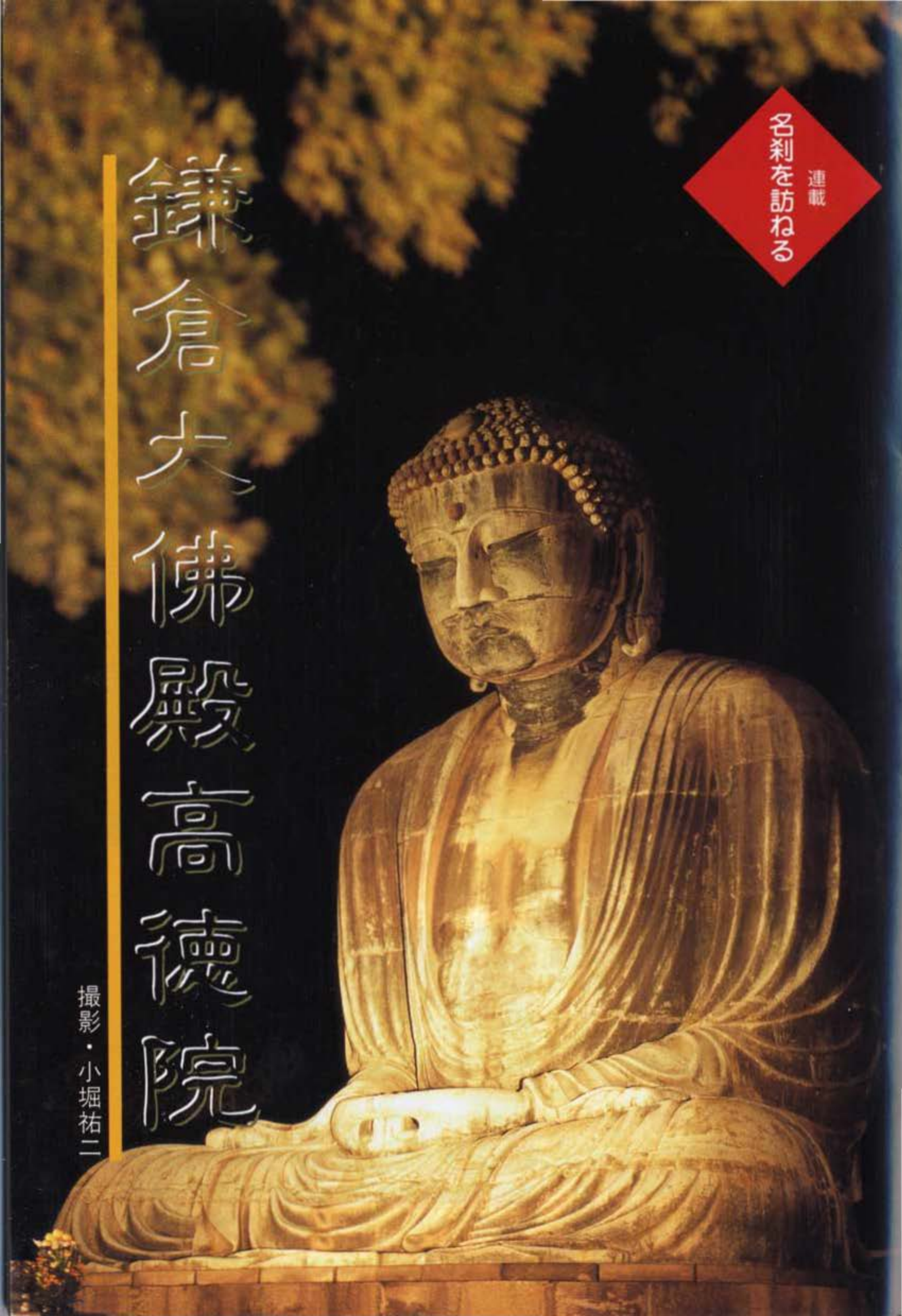
お申し込み、お問い合わせはお客様センターへどうぞ。

☎ 0088-82 (無料) または 0120-0088-82 (無料) [受付時間: 9:00~23:00 (年中無休)] [インターネットホームページ] <http://www.japan-telecom.co.jp/service/>

連載
名刹を訪ねる

鎌倉大佛殿高德院

撮影・小堀祐二



鎌倉
大佛殿
高德院



大仏を参拝する観光客で境内はにぎわっている



第十三世住職佐藤密雄先生



修学旅行の生徒も訪れる名勝地だ



静かに大仏を写生する



多くの外国の要人が訪れる。
この碑はスリランカの大統領の碑



毎年秋に行われる鎌倉大仏月夜の別時念仏会。
露座の大仏の前で夜通し念仏を称える行事だ

浄土

1997/1月号 目次



カラーグラビア名刹を訪ねる	写真=小堀祐二	3
新春インタビュー 鎌倉大佛 佐藤密雄師	聞き手=宮林昭彦	8
新連載小説 法然上人をめぐる人々	石丸晶子	22
御法語に聴く		30
表紙は語る 灯台 闇を照らす光	岡 克己	35
檀林から念仏の森へ	野呂幸進	36
午後の日差しのなかで	吉川英明	42
コラム 若和尚のチョットいいはなし		49
うまい野菜と料理の話	我田 大	50
子規の庭	大畑 等	56
Jフォーラム		65
事務局便り		69
編集後記		70

表紙題字=浄土門主 中村康隆猥下

表紙撮影=岡 克己

アートディレクション=近藤十四郎

仏壇・仏具



翠雲堂

東京・浅草 ☎03(3842)0201(代表)

ひといきるときししょうじんならざれば

人生不精進

たとえばうえきのねなきがごとし

喩若樹無根

鎌倉大佛殿高德院 佐藤密雄上人インタビュー

聞き手

宮林昭彦

生まれ育った高岡

◆今日は、あまり固いお話ではなく先生の人生について、あるいは現代に対しての提言など思いつくままに語っていただければと思います。

お生まれは確か1901年、明治34年になりますか。

◆そう、34年の10月9日ですね。

◆富山県の高岡のご出身でしたね。

◆高岡っていうことが大事なんですよ。富山に対抗して高岡だ、と言い張るところがあつてね。ここが本城だという意識が高岡の人間にはあるんです。

◆ああ、なるほど。そういう土地柄なのですね。その高岡で、仏門に入られたのは何歳ぐらいの頃ですか。

◆そうですね。9歳かな。あのときは、いや小学校の1年というべきかなのかな。

◆と、いうと、どういうことになりますか。

◆小学校に2か月ほど行ったときに父親が死にましてね。それで学校に行けなくなった。次の年に近くの極楽寺に引き取られたんです。その極楽寺で小学校の1年終了の試験を受けてね。

◆そういう試験があつたのですか

◆馬喰町小学校に入るために、別の小学校まで行って試験を受けてね。それで正式に入り

直したということになるわけです。

◆お寺は極楽寺でずっと、ですか。

◇そう。お寺は極楽寺。その当時の和尚は萩行密厳という方だった。私と同年の弟子もいてね。高等小学校が3年あるのを2年でやめて中学校を受験した。その弟子は次の年もその次の年も受けたが落ちてね。そんな思い出がありますね。

お寺での生活

◆当時のお寺の生活はどんな風でしたかね。

◇かまってくれなかったね。放っておかれた。学費だけは出る仕組みになっていてね。つまり檀家さんに毎日おまいりに行くんです。阿弥陀経を読む。それが読めればいいというわけです。

◆小学生で阿弥陀経を讀じておられたわけですね。

◇そう。毎日5、6軒。それが一番重要な仕事でしたね。下寺に尼さんがいらっしやっつてね。お寺で回れないと「今日は何処に参りましょう」と聞きに来る。で、3人で協議してね。区分けして拝みに行くようなことでした。で、まあ行けばお布施をいただくんですが、それを貯めておいて学費に当てるというわけですね。お寺は飯を喰わせればそれでいいわけですね。弟子に手が掛からないんですね。

◆なるほど。一種、自立しているわけですね。当時のお布施は幾らぐらいのものなんですか。



か。

◇1銭か2銭だったなあ。3銭くれる家は豪勢でしたね。とにかく5銭ということはなんだ。その頃は5銭というのは銀貨でね。穴の開いた白銀の、ね。

◆ま、それで学費は全部出たわけですか。

◇余ったくらいだった。学用品とか必要な物はすべて買えてちゃんと揃っていました。

◆そういう寺での生活のなかで、将来、お坊さんになろうと思っていたのですか。

◇母や妹はそう思っていた。母は私が寺にすることで自由になりましたからね。で、再婚しました。その家はいま私の郷里きとのようになっています。極楽寺は大きな寺でね。小僧の一人ぐらい増えてもどうってことない。着物の面倒もみてくれますしね。お檀家のおばさんが羽織をくれたり、着物もくれましたし、お布施のほかに、お小遣いをくれる家もあった。

◆高岡は真宗の地盤ということもあって、いわゆる篤信者が多い、お坊さんを大事にする土地柄ですね。

◇下着から何から全部取り揃えてくださるお檀家もありましたよ。

◆学校はどんな雰囲気でした。

◆軍事教練なんかがあったな。

◆大正デモクラシーの時代に？

◇あった。1年に1回は演習もあった。体操の先生のほかに軍人が2人いましたね。

◆スポーツは何かおやりになっていましたか。

◇あまりね、大体が自然体に生きておったから。テニスを少しやったぐらいだな。

学生時代

◆京都の佛専（佛教専門学校）にいらしたのは。

◇大正11年頃かな。

◆関東大震災の前、ですか。

◇上善寺の時計が止まったのをよく覚えていますよ。京都にいても大変なことだというのを感じました。上善寺には福原隆成さんがいらっしゃった。生涯独身で、勉強もされた方だった。いまの佛大の福原（隆善）さんの父祖にあたられる方ですね。もちろん律僧ですから、確か甥ごさんか何かを後継者にしたんじゃないかな。

◆今度は京都のお寺の生活になるわけですが、如何でしたか。

◇居心地のいい所でしたね。とにかく女っ気がない。男ばかりの所帯でね。炊事も寺男がいて。それに福原上人は知恩院の重役でしたから、寺にいないことの方が多い。気楽に過ごしました。

◆その頃の佛専の学長は小林隆浄さんでしたね。佛専では宗学中心にやられたんですか。

◇そうです。3年やった。

◆それで大正大学へ。あ、まだ宗教大学の時期なのかな。

◇並列だったですね。宗教大学がまだ終わっていない。大正大学も始まっていた。完全に移行していないという時期です。

◆その頃ですと望月信亨先生がいらっしゃった。

◇学長になられたが、どの時期だったかな。確か、一代目が

◆沢柳さん。二代が権田雷斧、三代目が望月さん、でしたか。学長ではありませんが荻原雲来先生はいらっしゃったですか。

◇サンスクリットを少し勉強しようと思ってね。お家へ梵文を読みに行った記憶があります。そのとき一緒に行ったのが佐藤良智君。

再び京都へ

◆それから長いつきあいになったわけですね。それで、佛専に教授として戻られたのは。

◇松本徳明さんの後ですから、昭和7、8年頃ですか。

◆ああ、松本さんがドイツに行かれた後ということ。ということは三国同盟の前になりますね。再び京都での生活。これは如何でしたか。

◇今度は家を借りてね。竜安寺西の川町に借家を。

◆奥さんをお貰いになって新婚時代というわけですね。

◇小杉勇という俳優が借りていた家に住んだ。

◆小杉勇。いましたね、そういう役者さん。原節子なんかと共演したあの、ちよつと癖の

ある性格俳優。ということは立派な家なんですね。

◇立派じゃないけど小綺麗ではあったな、何かそれらしい家だった。大学の先生とか役者に貸すというのは家主の一種の政策みたいなものでしてね。あんまりいい家主じゃなかったけど（笑）。

◆給料はどのくらいだったですか。

◇90円か100円近く貰って、お手伝いさんを雇って暮らしていった。

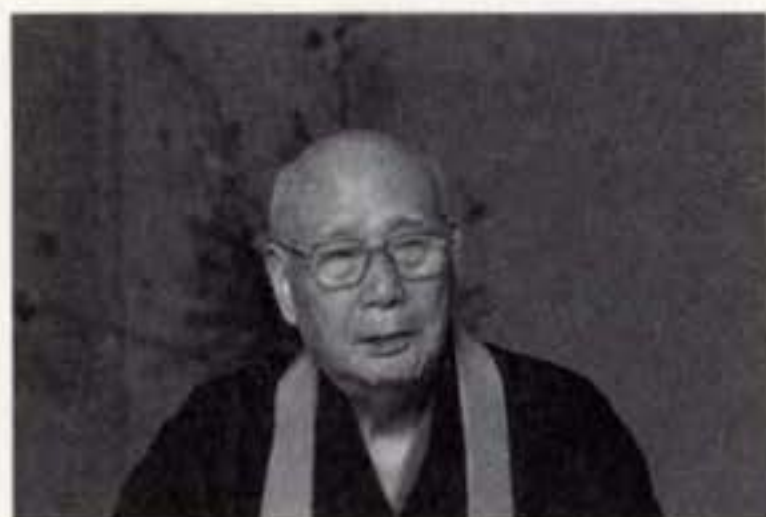
◆京都時代の思い出というと。

◇学生時代の知り合いでね。森本省念という人がいてね。上善寺で一緒に暮らした仲間で京都大学に行った。この人が小遣い稼ぎに同志社に教えに行ったりしてね。よくその金で奢ってくれた。鍋を食べたりして。主として同志社でね。代講をやったのか、誰かが1年外国に行くというと彼が代わりに講義するというようなことだった。当人は禅に凝っていたね。相国寺へ毎晩坐禅を組みに行っていた。実に愉快な人物だった。上善寺の居候だな。草取りしたり、いろいろ手伝いしてくれたり研究会に行ったり、相国寺に行ったり、善い人だった。晩年までつきあいがありましたね。

◆佛専の先生として山口益先生門下とのつきあいなどありましたか。

◇あった。佛専の教授で行ってから梵文の講義を聴いています。いまはその二世か、三世か。

◆舟橋一哉氏が孫ですか。



◇彼も現在は大谷大学の教授。親子三代の家系だね。

◆学問されるには京都はよかったでしょう。

◇そうです。特に梵語。いろいろ恩恵に預かった。京都大、大谷大、龍谷大の連中と一緒に山口さんを中心にして本を読んだ。京都はこじんまりしているからいいんです。本が一冊出版されてそれがちよつと問題になっていると、皆で読みこなそうとした。京都大学の若い連中も大谷も龍谷の助手クラスもみんな集まってきたてね。

鎌倉大仏に入山して

◆昭和17、8年に京都から帰って来られたのですね。その頃の大仏さまはどんな状態でしたか。

◇戦争で参詣が少なくなりました。

◆大仏さまには元々お堂があったのですか。鎌倉大仏といえば露座の大仏ということでも歌われているわけですが。

◇あつたらしいのです。だが、どんなお堂だったのかわからない。明治になって建てようとした時の設計図は残っているんですがね。その頃のパンフレットがあります。それを配ってお金を集めて作ろうとしたらしい。いろいろ意見が分かれていましたね。作らない方がいい、という意見も強い。建てておく方が正常だという意見もあります。近代の巨大建築の粋を見せるという意味で作って悪いということはない、ともいえます。

◆開山750年ということで、企画されたらどうですか。先生の百歳記念にもあたるし。

ここでインタビューに立ち合われていた高德院副住職の佐藤行信師が

◇あと5年ほど、というと、私が71歳、古稀ですよ（笑）。

◆ところで、昔から参詣があつたのですか。

◇あつたですね。此処はそれでもっているんだから。

◇いまは鎌倉全体として観光客が増えているようですね。

◆ご住職となられてから、戦前と戦後の意識の差などお感じになりますか。

◇神仏を崇拝する形は同じでも、その概念が違ってきている気がしますね。こういう所に来たら手を合わせることだけは承知しているが、中身が違う。心の中が純粋な人ばかりではないように思えます。

法然上人鑽仰会設立の頃

◆法然上人鑽仰会設立の頃のお話を伺いたいのですが。あれは真野先生が中心となつてということでしょうか。

◇そうでした。真野先生のところの土曜会。

◆御門跡の中村康隆上人も。

◇門跡はあまり出席しませんでたね。あと佐藤賢順、良智。それから栗本俊道。彼は何処にでも顔を出すタイプでした。

◆岩野真雄さんとか。

◇浄閑寺の先代ですね。お寺が忙しくてね。なかなか出て来なかった。

◆ところで先生は戒律の専門でしたが、そういった立場から現代の若い僧侶をどうご覧になりますか。

◇明治以降は妻帯派が主流になってきましたね。

◆渡辺海旭の新戒律運動がありましたね。あれはどう思われますか。

◇それはよく知らないのですが、ともあれ禪宗のお寺でも奥さんがおってね。しかし古来、日本仏教には、まともな妻帯論はないんですね。実態が先行していて追認されていただけですね。

◆最後に長寿の秘訣をひとつお教え願いませんか。

◇秘訣なんてものは、ね。ありません。自然体でいるということ。いまでも、あ、これが死期の迫っている前兆か、と思うことがありますし、必ずしも万全の体調ではない。この半年、東京に行っていない。

◆いま何をしてみたいですか。

◇二、三泊で少し遠い所に行ってみたいですね。

◆ハワイとか。

◇そうだね。5、6時間だからね。東南アジアでも行ける。アンコールワットもいいね。

長寿の秘訣

◆とにかく自然体で生きるということですね。

◇あれをやめようとか、たとえば酒をやめようとか思ったことはありませんね。自分を戒めようと思ったことはありませんね。

◆頭をよく使うことが秘訣ですか。法話の会で読むことがいいとか。

◇わからないですね。もう鏡みたいなもので映るだけで残らない。

◆いやいや記憶力もあるし。

◇誰が記憶がいいもんか（笑）。

◆楽しみというと、何になりますかね。

◇ない。だから死んでもいい（笑）。

◆百歳までなんていうと、あとわずか5年ですから、かえって失礼になりますね。どうですか、百二十歳ぐらいまで。

◇あんまり長生きするようなことを守っていると早く死ぬ。貪欲もいかん。ただ自然体ですね。しかし、我々はたとえば転んだらそれまでですからね。

◆なるほど、もっと沢山のことに伺いしたいのですが時間も尽きて参りました。本日は長時間にわたり有難うございました。



インタビューを終えて

宮林昭彦

大仏さまは、正面で拝むのが正統かもしれないが、客殿の庭から、斜め横に拝んだとき、より美しい尊顔に接することができる。

美男におわす大仏さまを拝み、枯れ山水の美しい庭園に囲まれた客殿で、お話を伺うことができた。

おもえば佐藤密雄先生のご指導をうけて、はや四十八年になる。終戦直後の混乱期の昭和二十三年であったか、五十年前の先生と今に至る姿勢は全く変わらない。

やや照れ屋の面があられるが、いつも恬澹^{てんたん}としておられ、ときおりウィットに富みながら、批判精神も旺盛であられる。学生時代は荻原雲来先生に師事し、結婚式の戒師は渡辺海旭先生がつとめられ、京都佛教専門学校時代には、京都大、大谷大、龍谷大等の教授陣と交流があられた。いわゆる山口益博士門下生との研究活動が、阿毘達磨仏教、律蔵の研究等に実が結ばれたのである。

お話しの中に森本省念老師のことが出てくるが、かつて青春の多感な時代に薰陶を受けられた佐藤先生が、四十年後のあるとき、禅墨跡展で出会った折に、世俗の私生活は語らず、八十歳を過ぎても、往年の一途な求道の姿に感動したことを伺ったことがある。

九十五歳の今も佐藤先生は、毎日大仏さまを拝み、午前中は書斎生活をし、月に一度、法話の会で講義を続けられている。

いまだに求道へのひたぶりが感じられる先生の茶寿（百二十歳の祝い）を、祈ってやまない。

連載

名刹を訪ねる

真山剛

鎌倉大佛殿 高德院

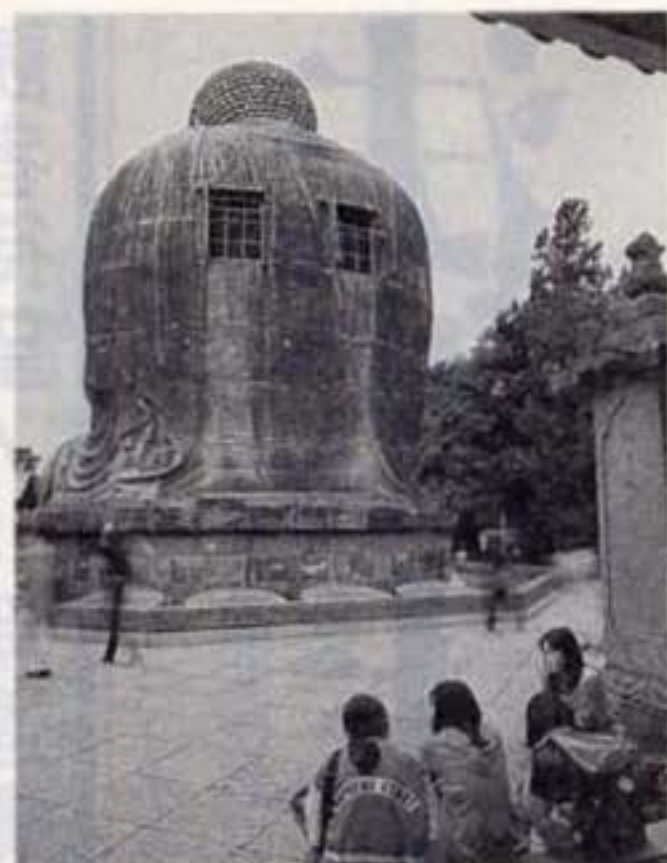
大異山清浄泉寺高德院と聞いて、どこのお寺か分かる人は日本でもおそらく数えるほどだろう。しかしこの寺の通称を聞けば、それで分かる人は全世界でおそらく想像がつかない数にのぼるに違いない。

そう高德院の通称は鎌倉大仏、鎌倉大仏殿高德院という。

関東の古都鎌倉にでんとそびえる大仏さまのお寺である。こう聞け

石炭晶子

奈良東大寺



大仏の胎内にも入ることができる

ば、そうか鎌倉の大仏さんかとすぐその姿を思い出されるだろう。師走に入った最初の日曜日、取材で訪れた大仏は家族連れ、恋人、夫婦、団体、そして外国人であふれかえっていた。

「4月から5月の連休にかけて、多いときは一日二万人の参拝者がお見えになります」高徳院の佐藤行信副住職は説明をしてくれた。

「源頼朝が奈良東大寺の大仏殿復興の供養に列席し、自らが関東鎌倉の地に作る都のシンボルとして同様な仏像を作ろうとしたのがこの大仏建立のきっかけと言われています。ですが残念なことにこのお寺の創成期に関する資料はほとんどなく、正確なことはわかりません」

奈良は毘盧遮那仏、鎌倉は阿弥陀仏と、同じ大仏でも仏の種類が違ったり大きさも違う。しかしもっとも異なるのは鎌倉の大仏が露座であることだ。露座（ろざ）とは建物の中になく、空をいう。そう、空を天井とし、山を壁とする仏なのである。参拝者を優しく見つめるために少し前に競り出たのか、と思われる顔を見上げるとき、わたしたちは空中にその柔和な表情の顔を拝むことになる。晴れわたった空、紅葉に色づく森、四季の自然を借景とするこの大仏、建立当時はお堂に収められていたという。しかしお堂は台風や地震といった自然の力で倒壊、現在の露座となっているのだが、自然に溶け込む今の姿が一番美しいように思う。雨にも風にもさらされる、この大仏さんはわたしたちと同じ世界に身を置いていてくれるのだから。

（ルポライター）

読者待望！ 新連載小説

法然上人をめぐる人々

【第一回】大胡四郎隆義の回心

石丸晶子



赤城山南麓の、旧利根川河道低地帯に、大胡氏が勢力を延ばしはじめ、大胡郷おおご郷が形成されたのは、十二世紀の半ばごろ。鳥羽法皇の院政時代である。

本家は下野の藤姓足利氏で、大室、深須、山上、佐貫氏ら、他の赤城山麓武士団とともに、以来大胡氏も分家の一翼を担うことになったのであった。

この大胡氏に浄土の教えがもたらされたのは、治承四年の夏、源三位頼政が以仁王を奉じて、打倒平家の旗揚げをしたことに関わっていた。

つまりこのとき、清盛の命をうけ、坂東武者の一団が京に馳せのぼったのであるが、その武者たちのなかに、本家の若殿足利又太郎忠綱に率いられた、大胡郷の当主四郎隆義の姿もあったのである。

「わしは三十三であつた。京に馳せ参ずるや、頼政軍と宇治川を間にしての橋合戦よ。川をはさんであちらとこちらで敵味方たがいに見合みあうていたが、折りから降りつづいた五月雨で、川の水嵩は増して橋など渡れたものではないわ」

のちのちまでも隆義は、こう、そのときの思い出を嫁の佐代に語った。

「思えばあれが、壇ノ浦まで五年もつづく源平争乱の始まりであつた」

隆義は感慨深げに言う。

「濁流を前にした平家の面々、みな怖じ氣づいて互いに顔を見合わせるばかり。そこへ本家の又太郎殿が先陣を申し出られたのだ」

隆義は佐代をみつめて言う。佐代は又太郎の妹であつた。

「若殿は平家の御大将の前に進み出るや、こゝう進言された。『以仁王をこのまま南都にお逃しすれば、興福寺の僧兵をはじめ吉野、十津

川の武者たちも寄り集まり、大事になりましたよう。坂東には、武蔵と上野の境に、利根川という大河があります。この宇治川の深さ早さ、利根川に勝り劣りはありますまい。』とな

佐代には何度聞かされても飽きない亡兄の話であつた。

「それから我らを振り返られるや、若殿は叱咤されたのよ。『坂東武者のならい、敵を目にかけ、川をへだてた戦いに淵瀬を恐れることがあるうか。続け、者ども』。あの大音声が今も耳に残っておるわ」

当年十七歳の又太郎は、力は百人に匹敵し、声は十里にひびく、といわれた末代無双の勇者であつた。彼はこう檄をとばすや、真っ先にざざつと川に乗り入れた。

「そこでわれらもおくれじとよ、一族郎従三百余騎、一斉に濁流の中に馬を乗り入れた。あとはもう、夢中であつた」

「はい」

佐代の目にはそのとき、喚き叫びながら一斉に、敵陣を目指して川を渡る、馬上の武者達の先頭にたつ兄の姿が浮かんでいた。

平家物語が、宇治川の橋合戦としてしるす名高いこの緒戦で、以仁王、頼政らは戦死。平家に勝利をもたらした足利軍団は、清盛から数々の恩賞をもらい、故郷に帰ることになった。

そしてこの帰途につく前日、隆義は吉水に法然を訪ねたのである。

二

それは特に道を求めたわけではなく、ふと思ひ立ってといつてよかった。上洛したついでに、今、都で評判だというお念仏の上人を見、その教えというものを聴聞してみようという、多分に好奇心のまざった気持ちであつた。



「なぜ、御房にはそのように念仏を称揚されます。我が心の修行こそ大切と、坂東の寺では聞いて参りました。われら大胡の家でも、赤城に寺を寄進し、経を誦し、家督をゆづったのちは、出家して後世にそなえるのを常としております」

法然と対面するや、彼は自分のほうから口を開いていた。

人と人との出会いには、まことに不思議なものがある。長年付きあっている、心が通わず、表面的な関わりしかできないし、したくもない場合もあれば、一目見て惹きつけられ、離れがたく、別れがたくなってしまいう場合もある。

隆義は一目で、法然につよく惹かれてしまったのであった。武骨な彼はそんな自分の心に照れ、心を悟られまいとして、却って怒ったような調子でつづけた。

「御房のお説を承りたく存じます。坂東は各

地で武士団相乱れ、争いのたえぬところ。われらも若年より戦いの中で生き、仏の教えを学ぶゆとりありませんでした。寺を寄進し、経を読んで修行する、それ以上のことは知りませぬ。此度巷の噂を聞けば、御房の教えはまことに耳新しく、故郷に帰って都のみやげともいたしたい」

厳しく、しかし溢れるほどに優しい光が、法然の目にさした。法然は一、二度かすかに頷くと、

「大胡家の方々がなさって来たこと、まことに尊く立派なことです」

と口をひらいた。

「しかしまた考えてみると、生涯、罪なくしてはすまされぬのが人間です。そんなわれらが、いかに修行を重ね、努力を重ねても、そこにはおのずと限界があるのでありますまいか」

うしろの山で、小鳥がしきりに囀っている。

その囀りの中で法然は言葉をつづけた。

「たとえいささかなりとも、人間界で犯した罪を携えて、仏の国に入ることはできないのです。仏の国は光明無辺、清浄無辺。いささかの争いも邪心もない、浄められた者たちが弥陀仏とともに、無終の幸福を楽しみ、分かち合うところですから」

法然の言葉は、尊大なところがどこにもなく、易しく分かりやすかった。隆義は権威ある者のように法然が語り、しかもそれが非常に分かりやすいのにおどろいた。

「であれば、われらがいかに努めてみても、自力で仏の国に往こうなど、矢なくして空飛ぶ鳥をとらえ、足なくして高い梢の花を手折ろうとするようなもの、と私は思います」

今はもう半ば茫然として彼は法然の顔をみつめていた。このような言葉を赤城でも足利でも、かつて一度も耳にしたことがない。

「しかしそんなわれらが、確実に浄土へ往け

る道があります。阿弥陀の願力の翼に乗って、罪深い人間の身である我らが、確実に仏の国に往けるという一つの道が」

生涯、隆義はこのときの衝撃を忘れることができなかった。それは、今まで一度も彼が出会わなかった新しい言葉であり、新しい言葉で語られた仏の国のことであつた。

途方もない未知の世界が、自分の前に突然つきつけられたのを感じながら、彼はさつき上がって来た吉水の坂道を、ゆっくりと下りて行つた。

隆義の懐には、法然に願って書いてもらった、弥陀の本願と、その願力の翼に乗って、仏国土に往生するという文が、大切にしまわれていた。

三

隆義が足利勢二百余騎とともにふたたび海道を下り、赤城に凱旋したとき、関東の状勢

ははげしく動きはじめていた。

八月、伊豆で挙兵した頼朝に合力する武士たちが、関東平野のあちこちで起こりだしたのである。

藤姓足利氏のもとに結束をほこった赤城山麓の武士団も、そうした状勢のなかで、その心は日ごとにまちまちになっていた。

「殺人なしにはすまされぬ乱世の武士の身。なれど人間の救いがたさが身にしみたのは、寿永二年のあの事件からよ。法然さまの教えが真にわしのものとなったのも、あの時からであった」

隆義はしばしばそう回顧した。

「足利の大殿俊綱殿が、一の信頼厚い郎従桐生六郎に殺されたのだ。御首は鎌倉に送られて検分されたというが、六郎は御家人になるために主殺しをしたという。又太郎殿が平家に味方したのが仇になったのだ」

吾妻鏡は養和元年のこととしているが、史

家によると、実際は寿永二年のことであろうという。

当時、坂東でもなお平家に味方する武士団もあり、源氏側の武士団との間で、関東平野各地で戦闘がひろがっていた。

藤姓足利氏では、当分の間は源平いずれにも肩入れをせず、状勢を見守っていたが、ついに寿永二年、又太郎忠綱は、平家方の志田義広の援軍要請に応え、常陸に向かって兵を率いたのである。

この忠綱の行動によって、足利の本拠は、和田義茂を将とする源氏の軍勢に攻撃されることになった。

ところが、常陸の合戦では志田軍が敗北してしまったのである。忠綱は辛うじて父俊綱が守る足利の本拠に敗走して来たが、桐生六郎はこの忠綱を、

「足利は大殿とわれら郎従でお守りいたしますゆえ、若殿は西海の平家と合流して下さい。」

平家と合流され、鎌倉に攻めのぼられるのが上策です」

とそそのかし、無双の武者と恐れられた忠綱を、西海に向かわせた。

こうして俊綱、忠綱父子を切りはなすことに成功した六郎は、隙をついて俊綱を殺害。

梶原景時を間に立てて、日数を経て面変わり
はげしく、目もあてられぬ俊綱の首を腰越え
まで持参し、報償として御家人の列に加わる
ことを頼朝に求めた。

だが景時から六郎の要求をきいた頼朝は怒
った。吾妻鏡はこの時の頼朝の言葉をこう伝
えている。

「たとえその場限りの賞讃であれ、譜代の主
人を誅した者を賞讃する言葉などない。六郎
を即座に誅し、首を俊綱の首のかたわらに置
いて梟せよ。足利は領地のみ没収。俊綱妻子
の居宅、資材は安堵する」

この事件は、本家とともに従来生きてきた

大胡家の者にとって、存亡にかかわる大事件
であった。

橋合戦の日からすでに三年が経ち、時代は
平家から源氏へとすでに、大きく変わってき
ていた。

鎌倉殿に馳せ参じる以外、大胡が生き残る
道はない。隆義の腹はこのとき定まったので
ある。

(つづく)

（石丸晶子）
東京生まれ。東大大学院人文科
学研究所修了。東京経済大学教
授。一九九一年「式子内親王伝
」面影とは法然」で第一回紫
式部文学賞を受賞。「法然の手
紙」（人文書院）「お手紙からみ
る法然さま」（浄土宗出版室）

御法語に聴く

御所作おおくあてて、つねにずずをもたせ給
い候わば、おぼしめしいで候ぬとおぼえ候。

『往生浄土用心』

日課念仏（毎日欠かさず称えるお念仏）の数
を多く定めて、いつも念珠を持つようになし
ていけば、お念仏のことを思い出すようになる
と思います。

相続

しばらく前の話になりますが、腕輪念珠が流行になった（と思われる）時期がありました。電車の吊革を握っている手首にそれを見つけることもしばしば。よっぽど信心深い人なのかなと、視線を手首から体の方へ移してゆくと、案外、茶色く染めた長い髪の毛に、ベルトをお尻のあたりまで下げ、引きずるようにしてダブダブのズボンをはいている青年だったりします。もともと、信心と格好には何の関係性もありませんから、それはそれでいいのですが、どうも若い人たちの間で特に流行っていたようにも見受けられました。フアッションに敏感な彼らにしてみれば、腕輪念珠もその一つとして、
“珍しいモノ” 感覚で取り入れたのかもしれない。

そういえば、仏具屋さんのカタログを開くと……。あります、あります、おびただしい種類の腕輪念珠が。赤や黄色、ピンクに緑……。念珠も随分と艶やかになったものです。材質もプラスチックのものあれば、香木、高価な石を使ったものも。お値段だって数百円のもの

から、ナント数十万円のものまで様々です。更には、手首だけでは物足りないのか、何とも可愛らしい指輪念珠なるものも現れ出しました。こうなると、実用的というよりは、もう装飾品の域に入っているという感を免れ得ません。この流行はひと頃ほどではないにしても今も静かに続いているようです。

さて、皆さんはいかがでしょうか。やはりいつも手首につけていらっしゃる方は少なくないでしょう。私もまたしかりです。別に流行（？）に乗り遅れまいという気持ちがあつたわけでもありませんし、これでお念仏の数を数えようというのでもありません。ただ、つけているとホッとしますか、安心すると言いますか、仏さまが自分のそばにいて下さるという実感をもてることには間違いないありません。たぶん、そういう意味のもとに身に付けてよいものはなかろうかと、私は解釈しております。

毎日よくよく阿弥陀さまの御名を称えるべきことは言うまでもあ

灯台

りません。でもそれを怠ってしまったり忘れてしまうことも……。法然上人は「人の心というものは、何かを見たり聞いたりするそのたびに移り散ってしまうものですから、思わず他のことに心が奪われてしまい、お念仏のことを思い続けるのは難しいものです」とおっしゃったあとに冒頭に示したお言葉を続けていらっしやいます。

念珠を肌身離さず持っていればそれだけでいいというわけではもちろんありません。ただ、お念仏が、阿弥陀さまへの思いが途絶えてしまうことの多いこの自分にとって、それを相続するため、念珠を身につけて意識しやすいように、思い出しやすいようにしておくことが良いでだてになっていることは確かです。それを一層促すためであるならば、お気に入りのカラフルな念珠を手首にかけておくことも、また助業となるのかもしれない、と申しては言い過ぎとなりましようか。

お念仏は流行り廃りで称えるものではありません。ひとたび信を

発したならば、阿弥陀さまへ向ける自身の念いも一時のことで終わらせることなく、退転することなく、臨終の夕べまで相続すべきことを上人は繰り返して説かれています。どうぞ、上人のその教えがあらねくゆきわたらんことを、そして、念珠を身に付ける現今の「流行」が本当に「流行」に終わってしまうことなく、いつまでも、それこそ「相続」されることを切に願うものです。決してファッションとしてではなく、お念仏相続のための縁（よすが）として。

（無量寿寺・小村正孝）

灯台

撮影●岡 克己

闇を照らす光

闇の夜

漆黒の荒涼たる海に
投げ出され揉まれつづける一隻がある
波の音、船体の軋み
すなわち長い航海の疲労と不安
が頂点に達するとき
遠く、微かに
一条の光が見える
驚愕
わき上がる希望
生かされていることへの歓喜
光は次第に太く強く眩い力となって
船を包み込み
確かな航路へと導く

1月

石廊埼灯台

(旧名称→石廊埼灯台) 1871(明治4)年8月21日点灯。当時の木造八角形の灯塔は暴風で大破。1933(昭和8)年に現在の形に改築。■位置、北緯34度35分58秒。東経138度50分54秒。■塗色構造、白色、塔形、コンクリート造。■等級灯質、無等、単閃赤白互光、毎16秒に赤1閃光白1閃光。■光度 白光6万カンデラ、赤光6万7千カンデラ。■光達距離 20.5海里(約38km)。■高さ 基礎上頂高11.38m 平均水面上灯高59.54m。

灯台

長い歳月を越えて
聳え立つ塔



岡克己プロフィール■1948年岡山県倉敷生まれ。風土写真家、中村昭夫氏に師事。『Aqua21』に連載された『水のある風景』が高い評価を得る。灯台はライフ・ワーク。全国120カ所、2000枚に及ぶこれらの作品はCD-ROM『日本の灯台 第一集』(発売/ジェイ・ブレジアント)として好評発売中!!

特別奇稿

檀林から念仏の森へ

都市寺院としての大本山

大本山増上寺執事長
会館建設局局長 **野呂幸進**

背景は、まさに天を突く赤と白の槍東京タワー、そして豊かな緑に抱かれ黒黒とした薨を頂く、深い朱色の伽藍は増上寺。これは新東京百景の一つに選ばれている構図である。色のコントラストもさることながら、永い伝統文化と新メディアの融合、近世と現代、江戸と東京のクロスゾーンの典型的な風景の一つである。

○

明治の初め、東京に五つの公園が置かれた。芝、上野、飛鳥山、浅草、深川とどこもそれぞれ、増上寺、寛永寺、王子権現、浅草寺、深川八幡の境内を活用したものである。現代は、芝公園・上野公園・飛鳥山公園の三か所になっているが、芝公園に緑豊かな境内を提供した増上寺は、そのとき將軍の寺から庶民の寺への第一歩を踏み出したともいえる。丸山の梅林を中心とした往時の賑いは、今でいうトレンディースポットであったことが、当

時の記録に垣間見られる。

そうした信仰と休息や遊興が調和した、心身共に憩える場所として、庶民に親しまれた増上寺一帯も、昭和二十年五月二十五日の大空襲によつて烏有に帰した。増上寺の近代史が終わった日ともいえる、未曾有の法難であった。

○

辛苦の戦後処理を経て、薄いドーナツ型の芝公園の中心に現境内を形成し、復興の幕を開けたのは、まさに昭和三十六年法然上人七百五十年遠忌の佳辰であった。ここに完成をみた近代的な増上寺会館は、その跡伽藍の中心である大殿（本堂）建立のための大きな布石であった。

昭和四十九年東京タワーの眼前に、大殿がその威容を現わし、境内の整備を整えると、増上寺は都市寺院として、その新しい使命を遺憾なく発揮しはじめた。新しく多くの人々

スミヤカニ、トースターで焼く。このとき、油



「……」

の結縁に門戸を開き、各種講や団体を中心とした年中行事は、四季折り折りにこの地域に住む人、働く人々を広く集めて活況を呈しているし、港区に会場を提供している港区民まつりは、都市公園の中の立地が大きく貢献している。また薪能に代表される文化イベントも、チケット入手が困難な程人気を得ている。さらに各国VIPの相次ぐ来訪や外国人の多い都心は、国際的感覚をいやおうなく育むものである。著名人の葬儀を含むこうした諸行事は、実に多くの人々の足を増上寺に向けさせる結果となるが、それは大都市の中心という、抜群のアクセスに支えられている面も大きい。多くの人々に直接接する場にその本拠を置くことは、それだけ布教の機会に恵まれていることでもある。



冷戦後の閉塞的とされる社会状況の中、戦後の復興から幅広い教化活動の展開を計って

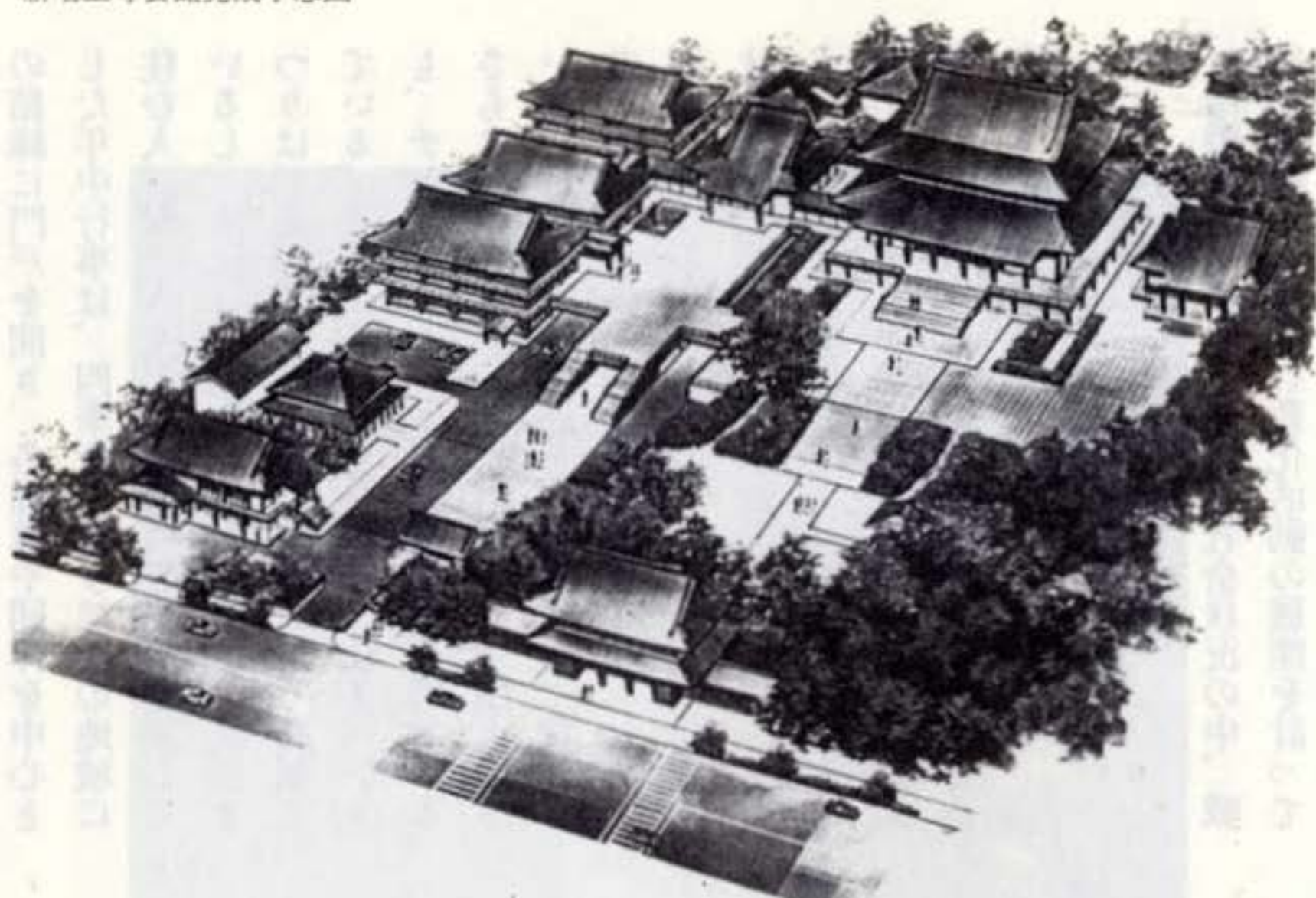
きた増上寺も、時代の変化と共にまた新たな段階に差し掛っている。

新しい増上寺会館の建設である。戦後復興の先陣を切った現建物も三十数年を経て、機能は限界に達してきている。寺院に多くの人々が往き来し、その心の交流を計る最適の場の提供が今求められている。会館という新しい伽藍の建設場所は、現会館から南の駐車場に至る地域に地上三階、地下一階、総床面積二三〇〇坪程で、この会館の事業計画を挙げれば、次のようである。

○伝法道場並びに研修施設を他の施設と隔離することができ、学習室、視聴覚室等を設けることにより、行・研修に専念することができます。また施設の充実に伴い、宗門団体、学校関係、一般企業、会社関係等の各種研修にも活用することができま

す。

○団体参拝でご来山頂く方々の休息室、宿泊施設が充実されます。またこの宿泊施



設は授戒会、五重相伝会等の受者の方々の参籠にもご利用頂くことになります。

○法要控室、会議室、会食室を十分に確保することが出来ます。

○文化関係施設として、文化教室（茶道・華道・書道等の各種教室）の充実を計つていく予定です。また二階玄関ロビーにはミニギャラリを常設し、参拝者並びに来山者に対してのサービスの一環とさせて頂きます。

○講堂施設は主に葬祭場としての利用となりますが、併せて講演会・発表会等にも十分ご利用頂ける設備を設けます。

○大食堂は南東に位置し、大きくまた明るい食堂となります。営業時間内は常に食事が取れるようにし、また喫茶室を併設して一般参詣者の方々にもご利用頂けるように計画しております。

こうしたコンセプトは、各種施設の充実化、教化文化活動の活性化、地域社会への奉仕を

目的とした事業を計画していると締めくくられてゐる。ここにみられる目標は、可能な限り多数の人々を対象としている。多くの人々が集まり易い、東京の中心に位置し、そうした利便性を、社会に密着した教化活動に反映させることができたら、念仏の種をより遍満に植えつけることが実現できるだろう。

○

「当山は大本山として、一宗の伝法を通じた教師の養成はもとより、檀信徒及び一般在俗の方々の心田に念仏の真精神を植え、養育することを第一の使命と心得、教化活動に励んで居ります。」との御法主台下の弁は、僧侶の養成と共に、檀信徒や一般の人々のまさに心田に念仏の真の精神を植え育てることを第一義に挙げられている。江戸時代増上寺は、関東十八檀林の首座として、僧侶養成の学問の府としての重要な役割をも担っていた。今檀林教学の大部分は、大正大学や佛教大学へと

受け継がれているが、それだけに、そこかしこに念仏の聲がこだまする念仏の森としての使命が顕著になってきている。

さらに「当山は念仏の伝法を通して、一人ひとりに心の潤いと安心を齎し、開かれた明るい明日を目指して雄々しく歩み続ける原動力を養育し、社会人の心の浄化と福祉に貢献することを望まれています。」と念仏の弘通が広範囲に展開し、一般社会の人々の心の浄化と福祉へ向かうことを御法主台下も強調されている。

都心の都市公園の中に位置し、都市に暮らす人々と日々接する、都市型の寺院である大本山増上寺が、西暦二〇三八年には死亡者数が今の二倍になるという難しい時代に向け、新会館の建立を機に、模索しながらも、斬新な教化活動に大胆に取り組まねばならぬ段階となった。

続

午後の日差しの中で

利器・鈍器

吉川英明



とある雨の日、都内の某ホテルに入ろうとしたら、入り口の脇に、屑入れの背を少し高くしたようなプラスチックの箱が二つ立っていた。

何のための箱だろうと訝る私に、同行の人が、

「傘をビニールの袋に入れる機械ですよ。最近、時々見掛けます」

と教えてくれた。

近ごろ、傘の滴で店内が濡れないように、雨の日にはあちこちの店の入り口に傘入れの細長いビニール袋が置いてあるが、あの袋に自動的に傘を入れる機械だというのだ。

スーパーや書店など客の多い店で傘立てに傘を置かせたのでは、間違いなどのトラブルが多いだろうし、そのまま持って入ったのでは、店の床はもちろん、商品や客同士の服を濡らすなど始末が悪い。使い捨ての傘入れ袋とは、いいところに目をつけた商売人がいるものだと感じていたのだが、今度は、それを自動的に処理しようという機械を作って売

り込んでいる人がいるのだ。だが、ちよつと待って欲しい。

確かに、あの薄いビニール袋の口を開いて、濡れた傘を突っ込むという作業は、面倒だし手も濡れる。その機械があれば、上から傘を差し込んで抜くだけで、傘はビニール袋に包まれる。

楽だし便利だろうが、

（ちよつと、やりすぎじゃないの？）

という気がする。何もそこまで機械にやつてもらわなくても、と思ってしまう。

それに、機械が故障したらどうするのだ。ホテルの係員を呼んで直してもらうまで、中に入れない。それに、係員だってその機械の専門家ではない。来てもらっても直らなかつたら、結局自分で手を濡らして傘をビニール袋に入れなければならないのだ。

馬鹿な話だと思う。

第一、あの機械は何という名前なのだろう。

『自動傘入れ器？』『自動袋入れ器？』『自動傘袋？』『アンブレラ・ラップパー？』

考えているうちに馬鹿らしくなった。どう具体的な名前をつけたところで、知らない人には何をする機械だか分からないだろう。

しかし、日ごろ気がつかないで使っているが、私達の身の回りには、一昔前ならとても考えられなかった程多くの、雑多な新しい機械や道具に溢れている。

そして考えてみると、そうした機械や道具には、それまでには思いも及ばなかったような新しいことが出来るものと、人が身体や手を使ってやってきたことを代わってやってくれるものの二種類があることに気がつく。

前者では、最近急速に普及したコンピューターや、ファックスなどがすぐに思い当たるが、今ではあるのが当然のようになっている飛行機や自動車、電話、カメラ、テレビなどももちろんそうで、これらはいわゆる文明の利器というやつだ。

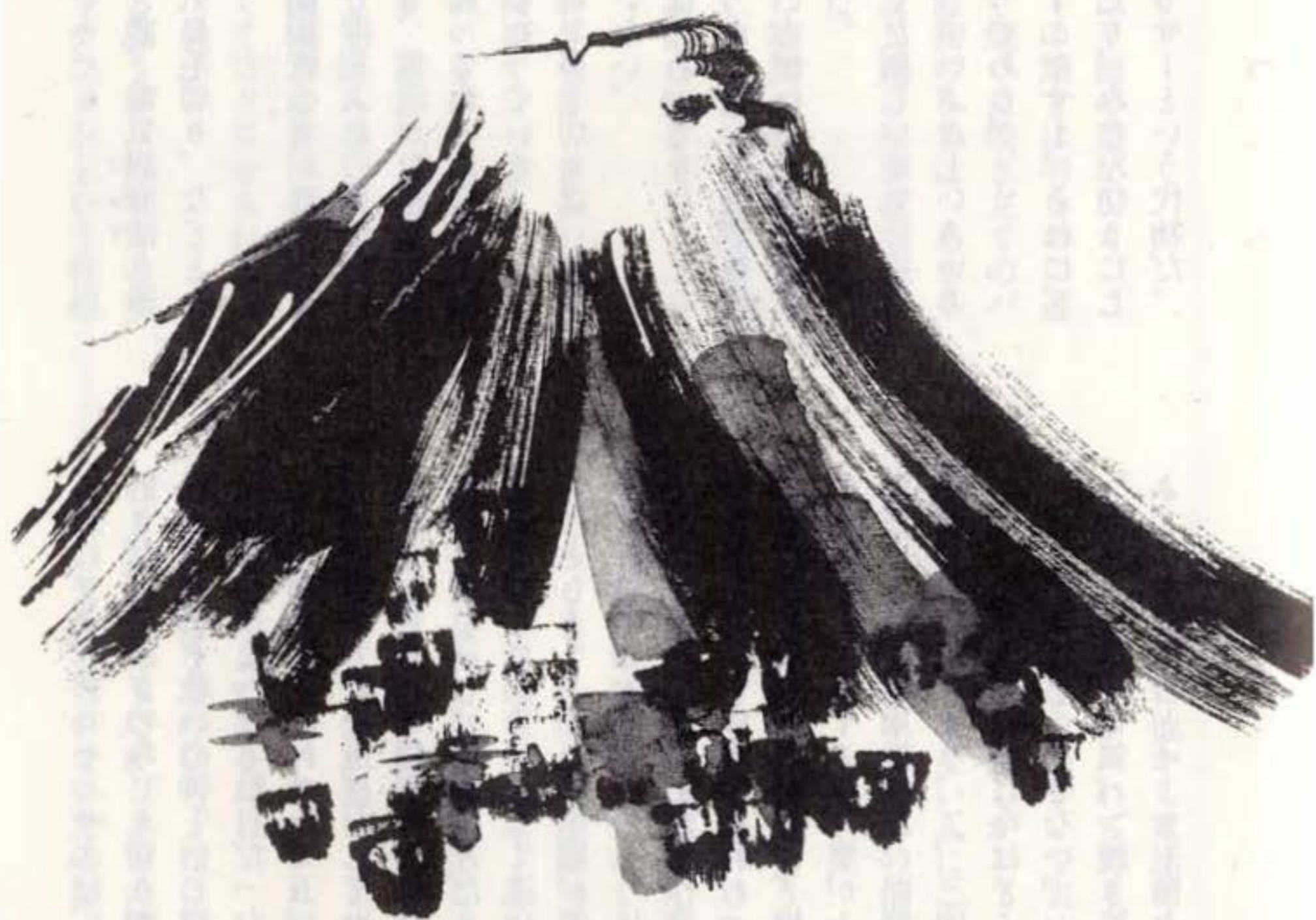
問題は後者の方だ。こっちには、本当に便利で、もう日常生活になくてはならなくなっているものと、どうでもいい、なくてもいい

ものとが混在している。

この手の道具に私が初めて実地に遭遇したのは、恐らく電気バリカンではないかと思う。中学のころだったから、昭和も二十年代だ。床屋に行ったら、いきなり、ブーンと刈り上げられてびっくりした。それまでの手動のバリカンより速いのはいいのだが、刈り後が何となく青々としすぎて嫌だったのを覚えている。

もっとも、戦後間もないころ、朝日新聞社から、アメリカのサラリーマンの家庭を描いた『ブロンディー』という漫画が出ていて、その中に出てくるトースターや、電気掃除機を見て、こんな便利な機械がアメリカにはあるのだと感心したのは、電気バリカンよりも先だった。

そのトースターや掃除機はいつのまにか日本でも当たり前になったし、電気洗濯機、電気炊飯器だって、今や使わない人はごく希だ。電気剃刀や電子レンジなどはなくても済むが、あれば便利で、これらもまあ文明の利器とい



イラスト・平野 稔

える。

ところが、電気餅つき器、電気胡麻擂り器ごます、自動糠味噌攪拌器ねかみそかくはんき、電気鼻毛切り、などとなるだろう。

電気餅つき器は、以前親戚の者が買い込んだが、数回使っただけで押し入れの奥だというし、電気胡麻擂り器も、電池がなくなつて、取り替えるのが面倒で放っておいたら、未だにそのままだという人を知っている。

自動糠味噌攪拌器と電気鼻毛切りは、使っている人にまだ会っていない。

要するにこれらの類は、あつてもなくてもいいものなのだが、うっかり買って後で後悔する点を考えれば、ない方がいとさえ言える。

かくいう私も、こうした新しい電気仕掛けの機械類は嫌いでなく、ずいぶんいろいろな買って、どこかにしまつてある。

まず、ご多分に洩れずミキサー、それに、野菜などを千切りにしたり、みじん切りにしたりするフードプロセッサーという代物だ。

殊にフードプロセッサーは、料理するのは好きだが玉ねぎのみじん切りが苦手だという私が、これぞ救いの神と信じ切って飛びついたのだが、まったく駄目だった。

目的別に用意されている五、六種類の刃から、目指すものを選びだしてセットし、野菜はあらかじめある程度の大きさに切ってから機械に押し込む。用が済んだら、本体から刃を取り外して両方ともよく洗い、刃は刃できちんとしてしまう……この手順が実に面倒くさいのである。

確かに速い。野菜を刻む作業そのものは、十数秒であつという間に終わってしまう。だが逆にその十数秒のために、機械をセットしたり洗浄したりする手作業が十分近くも必要だというのが本末転倒だ。面倒くささを際立たせ、白けてしまう。二、三回は使つたろうか。ミキサーと一緒に今はどこにしまったのか、すぐには思い出せない。

もう一つは、電気パン焼き器……トースターではなく、粉とイースト菌を入れて食パン

を焼き上げる機械である。

家庭でパンを焼くのは至難の業だから、これはフードプロセッサの類とは明らかに違う新兵器だ。事実これで焼いた焼き立てのパンは本当に美味しい。最初のうちは、あまりの美味しさに狂喜し、友人達の間を宣伝して歩いたりしたものだ。

だが、焼き上がるのに時間がかかるし、最初はあつという間になくなったパンも段々残るようになってくる。次第に飽きてしまうのだ。

しばらく使わないでいるうち、息子の友達が貸してくれといって持っていったまま、もう三、四年返ってこない。その友達はその後外国へ行ってしまったし、こっちも別に催促しない。つまり、なくても困らないのだ。

他にも一つ、これは機械ではないのだが、どうにも使い勝手が悪くて苛々させられるものがある。我が家にある。

使っている方も多いと思うが、NTTのサービスの一つで、キャッチフォンという仕組

み……電話中に他から電話が入ると、信号音で報せるといふ、あれである。

あれは便利なようできて実に具合が悪い。例えば、相手が忙しがっている時や、気を使わなければならない人にこちらから電話して話している最中に、あの信号音になると甚だ困る。

ちよつと待つてくれというのも申し訳ないが、誰がどんな用事で掛けてきたのか分からないし、放っておけば留守だと思われてしまう。丁重に電話が入ったのでと断って切り替えてみると、子供の友達だったり、墓地の売り込みだったりするのだ。こんな時には、つかつとなつて声を荒げてしまう。電話を掛けてきた方でも、何でそんなに怒鳴られたのか分からず、気分が悪いことだろう。話している相手のキャッチフォンに割り込みが入った場合も同じである。

そんな嫌なものなら、つけなければいいのにとわれそうだが、うちの電話には私の知らないうちについていたのだ。

はずそうかと言ったら、娘に猛反対された。あれは便利だと言うのである。

その辺が、私にはどうも分からない。

普通の会話なら、対話中に横から割り込んで来るのは極めて不作法なことである。電話だからいいというものではないだろう。掛けてみて話中だったら、待てばいいのだ。一刻を争う電話など、一生のうちそう始終あることではない。

同時に、電話をしている方も、要点をしぼって余計な長話はしないことだ。そう、キャッチフォンは長話を助長する。

娘がキャッチフォンは必要だというので、はずすのは我慢したが、要はこの機能そのものが中途半端なのである。この機能を使いたくない時は、簡単な操作ではずせるようにしておけばいいのだ。

そうすれば、大事な電話をかけたり受けたりした時ははずしておける。これは電話の優先度を各自が設定できるということだ。そうでなければ、こんなものはいらない。

NTTは、この手の付加機能をサービスと言っているが、もう少し使い勝手を考えて欲しいと思う。有料のサービスなのだから……。文明の利器は大いに結構。だが、鈍器はいらない……と結びを書きかけて心配になり辞書を調べた。

思ったとおり、鈍器という言葉には、この場合の利器の意味する「便利な機械や優れた道具」の反対の語釈はなかった。「固くて思いい金槌や棒」という語釈があるだけだった。新聞記事にはよく出てくる。強盗殺人なんかによく使われるやつだ。

昔はその説明だけでよかったろう。だが、これからは、辞書にも、文明の鈍器、即ち一見便利そうに見えるが、使ってみると駄目なもの……という語釈が必要になりそうだ。

(了)

明けましておめでとうございます。新しくなった年を迎え、気持ちもまた新鮮でいらつしやることでしょう。

前回と同様「法句経」からの言葉をもとにお話し致します。

「健康は最高の利得であり、満足は最上の宝であり、信頼は最高の親友であり、心の安らぎは最上の楽しみである」

決して健康が全てではありませんし、健康でないことが否定されるものでもありません。ただ、私達は生身の体である以上、いつどうなるかわからないものです。不摂生をつつしみ、常にコンディションを整えるように注意すること、そして同時に心を健康に保つべきことの大切さ

若和尚の

其二十一 し な は い い ト ッ ヨ チ

をおしゃっているのでしょうか。満足すること。これは今までにも何度か触れてきたかと思えます。お金に対してでも物に対してでも「もっと、もっと……」と我利我利亡者のとき欲ばかりを出していたのでは、自分をも周りをも見失ってしまいかねません。よく見極めて足るを知り、感謝の気持ちを忘れないことです。

信頼。自分という存在が、決して一人の力のみであるのではない以上、自分と周りの人たちが信頼の絆で結ばれることがどれほど素晴らしいことか、そしてそれを実感したときの大きな喜び。それはあたかも親友のようにこの弱い自分を支えてくれることでしょう。もちろん、

「信頼」は信頼されることと信頼することの双方が一体となっていることは言うまでもありません。

最後に心の安らぎ。これこそがまさにお釈迦さまの説かれる教えの目的であり究極と言えましょう。人間の心は散り乱れやすいものです。いえ、**「やすい」**どころか四六時中そうかもしれせん。だからこそ、掌を合わせ、自分の心を見つめ、静けさ、安らかさを求める必要があるのです。仮に体が健康とはいえないにしても、安らぎの心はそれを超える力にもなりますから。体と心の健康、満足、信頼、安らぎ。この四つを心に刻んで今年一年もよりよい日々を過ごされますよう。

(正)

うまい野菜と

料理の話③



あるいは

セ
ッ
ツ
エ
ー
バ
タ
ケ

自家菜園の

ひそかな

愉しみ

我田大

粟^{あわ}というものが食ってみたかった。十数年前のことだ。その頃は、雑穀類は買おうと思っても、どこに売っているかわからなかった。今みたいに、アトピーや食物アレルギー、自然食品なども流行って（？）なかったのでアワ、ヒエ、キビなどは簡単に入手できるものじゃなかった。では、と自分で作ろうとしても、そもそもの種がない。どこかで作っているのだろうけれど、そのどこかもわからなかった。

どうして粟が食ってみたかったのか、その理由は忘れた。けど、畑作りにハマった始めの頃で、作れるものはすべて一応作ってみようとしていた、その一環だった。知らないことと新しいことをやるうれしさが一番だった。やればやるほど、どんどん世界が広がっていくうれしさがよかった。その点、忘れられていて、人の作っていない粟などはなおさら作ってみる価値があるように思えた。でも少し人生上の意地もあった、と今思う。

私はUターンしてきて先生になろうとしたのだけれど、先方から断わられ続けて、じゃ

あと、身につけていた料理のウデで店をやることにしたのだった。それは一旦は趣味にしようとした料理で、ふたたびおまんまを食わなければならなかったことであつた。

例の大学闘争のなかで私は自分の受けてきた学校教育の内容がほとんど砂上の楼閣に等しいと思ったのだった。「頭でつかちしりくされ」というか。そのとき、身体をつかう職人の仕事か、かがやいてみえた。で後先は考えず、徒弟制という、伝統的というか前近代的というか封建的というかヤクザ的というかの、教育システムに自ら身をおいたのだった。そこでキビシイはずの修業は、案に相違して非常に楽しいものだった。親方に恵まれたこともあるだろうが。最初は魔法のように見えた先輩の仕事が、とても自分にはできないと思われた仕事で、できるようになるのは、すごくうれしかった。

たとえば魚をおろす時、最初はおつかなびつくりやっている。骨には身が残り、おろした身もぐちゃぐちゃだ。それがおこられながら数をこなすうちに、きれいにできるようにな

る。それには魚の骨の構造にそって包丁が動く感覚を頭でなく手が覚えなければならなかった。その感覚にいたるためには多くの魚をおろす経験、時間が必要なだった。それをやらすには魔法に到達できないのだった。そしてそうやって覚えたことは頭での知識とはちがひ、忘れるということはないのだった。例は書けばきりもないが、煮物、吸い物などて出し汁に味をつける作業なども最初は困った。他人が作ったのがうまいとはわかって、それがどうしてそういう味なのかはまったくわからなかった。当然それを再現することとはできない。そんな状態から、舌が味を、塩、醤油、味噌、酒、出しの旨味などの組成を一瞬にして了解し、目が液体の総量に対する不足分を量り（目分量）、加えると、ピタリ「喰い味」（食うにちょうどいい味、の板前語。「下味」の対語か）。というように自在な味のコントロールが出来たようになったのは、今振り返れば非常に短い間のような気がします。が、新入りにはそんな行為はとても乗り越えられそうもない壁に見えたのだった。

また封建的な親分子分的人間関係として世間からヤクザの親類のように見られていた板前社会も、入ってみれば技術の重視とか、職場移動のはげしさとか、同職組合とか、かえって西欧的な労働環境に近いと思われる面が多いのも意外だった。よく語られた「（ある店に）勤めるのは養子に行つたわけじゃないんだから、無理して耐える必要はない」というのは、当時の日本的雇用関係の特質とされた終身雇用制への痛切な皮肉に聞こえた。個人が身につける技術の重視は、人間関係が至上の価値になりやすい日本の組織と違って気持ちよかった。「仕事さえ間に合えば、調理場の外での行動は個人の自由に任せる」といった仕事感覚も、身も心も会社や国に捧げるなんてのよりずっといいと思った。

私は、将来店を持つとか、親方になるとかの明確な目標を持たないで、後先かえりみず板前社会に飛びこんだのだったから、こんなふうな修業の期間は快適だった。でも、腕がある程度つき、職人の末席をけがすくらいになると、人間関係や経営など、いろいろ料理

遠き道
五穀一
粟の
よもぎ



技術以外のことに気や時間を使わなければならぬことが多くなってきた。それが嫌だった。「二人仕事」をするタイプだった、と今になればこう言えはすむところだけれど。当時はその壁にぶつかって少し深刻になっていた。そして、また方向転換をしたのだった。

おおげさにいえば、大学までに得た知識の空虚さにあきれて、それを一旦捨てて板前社会に生まれ直した。その地点からは学校教育が欠落させているものがよく見える気がした。こういう経験を持った先生はなかなかいないから、いいんじゃないかと、一人合点して、こんどは田舎にかえって先生をすることにしたのだった。まあもう少しこみいった事情もあったが。それで採用試験を受けたのだがなかなか受からない。てまあ、ならば腕だけはある、それでもメシは食えるだろう、と店をはじめたのだった。

料理はもちろん嫌いじゃないのですが、商売となれば制約も多い。そこで新しいものの好きというかタンキュー好きの性格は、山や畑方面に向かったのだった。自分でとったり作っ

たりしたものを店で使えば経済的、なんて考えがぜんぜんなかったとはいわないが、それより新しい経験がおもしろかった。商売柄、普通の人より使う野菜についての知識はあるから、知っているの知らないの片っぱしから試作した。その数増やしには「あ、それ作った」とか「作っている」とすこしイバッテいた。いざばかりのコレクター的な気分があった。先生をことわられた腹イセ、とはちよつとちがうけど、野菜づくりや山菜とりキノコとりは、自分の挫折的な気分のつかい棒になっていた。そういう気分、世に忘れ去られた雑穀類を作ることばうまくマッチしたのだと、今は思う。

・・・人生上の意地の説明が長くなった。やっと粟に戻れた。そのころたまたま頸城地方（新潟県）に住む兼業農家のオバの家にいった。今まではそんなことしたことがなかったのが、畑好きになっていた私は、そのセツツエー畑を検分したり、納屋の中も観察した。興味を持つとやることがちがう。

と、そこに。壁の釘に何かがひっかかって

いた。あや。あ粟だぞ、これは。こんなところにあつた、いた。さっそくオバにたしかめた。やはり粟、そのモチ種だった。その来年の種を、たのんで一本もらい、栽培法もおよそをきいて意気揚々帰ってきた。

翌年春、五月の二十日頃、種を蒔いた。あ、粟の穂なんか見たことない人が多いかもしれない。通称ネコジヤラシというエノコログサの穂を大きくしたようなのです。それを手で揉んで落とし、種とします。うなつた畑に、スジ蒔きします。芽が出たら二回ほど間引いて最終株間一五cmくらいにします。これが辛気くさい仕事です、腰もいたくなるし。でもしないわけにはいかない。そんなら最初から一五cmおきに種を蒔けばいいじゃないかと思う人がいるかもしれませんが、そうはいかないのです。中で良い苗を選ぶためとか、もしもの時の保険の意味もある。幼苗期は近くに仲間があつたほうが競争して(?)成長が早いという理由もある。稲のように移植法でやれば間引きはいらないのですが、移植時に土が湿っていないと根付きが悪い。畑は水が得

られないからそうしていることが多いから、適当な雨がでない時は、こんどは水やりが大変なのです。

あとは中耕除草をかねた土寄せを二回するくらいで、八月下旬に出穂、一〇月下旬に葉が赤くなり緑色の穂が黄変した頃とりいれます。穂刈りです。しばって天日乾燥し、槌で叩いて脱穀、箕でハギリ(風選)、さらに広げて天日乾燥します。で、やっとこれで食べる、と思つたら大間違い。その小さな粒にも稲のように、粃穀と糠がまだついている。これをとるのが大問題。昔ながらの臼と杵方式をやってみたがとても能率が悪い。近所に頼むところもない。どうしようもなくて種をもらつたオバに送り、精白してもらいました。ふうつ、これでやっと食えるようになった。思いがけなく意地の問題が長くなり、粟餅や切って乾かしたカタモチを揚げたものの味について書くスペースがなくなってしまった。まあ舞い上がるほどうまいものじゃないですけど、しみじみうまい食べ物でした。以後毎年作っています。

子規の庭

大畑 等

前回に子規の庭の図（小園の図）を掲げたのであるが、そこに俳句が配置されているのが、いかにも子規らしいと思うのである。なものをも楽しんでもう子規の快活さを感じてしまおう。西側の垣根の外には「椎の実を拾いに来るや隣の子」があり、庭の中央には斜めに「萩芒水汲みに行く道一つ」の俳句がある。この庭で

鶏頭の十四五本もありぬべし

が生まれた。そしてこの句は議論の対象となり、歌人たちからの評価は高かったが、逆に虚子は岩波文庫版『子規句集』の選に入れなかったのである。故山本健吉氏の言うように虚子はこの句について「驚くべき頑迷な拒否」をしたのであろうか、それともただ単に子規の代表的な句とは思わなかっただけなのだろうか。そういう私の思惑なんぞは捨てて、この句をそっと「小園の図」に置いてあげたくなる。そうすると病床の子規と親しい弟子たちとの楽しい話や鶏頭が咲いている庭での

句会の様子が、この「小園の図」を通して甦ってくる。そればかりではない、病床の子規その人が甦ってくる。

実は、子規の俳句より子規その人に、今は驚いてばかりいる。即ち、脊椎カリエスのため激痛に襲われてヒューヒューと泣いている子規、病氣にもかかわらずよく食べる子規。寝床でペンを持つ右手で行を変えることができずに、左手で紙を送りながら書く子規。病氣にも、食欲にも、執筆にもそれぞれに対して子規は率直であり真剣である。そのような子規を私は驚嘆するのである。

泣く子規。『病床六尺』（明治三十五年六月二十日の記）より。

絶叫。号泣。益々絶叫する。益々号泣する。その苦その痛なんとも形容することが出来ない。むしろ真の狂人となってしまうへば樂であらうと思うけれどもそれも出来ぬ。もし死ぬことが出来ればそれは何よりも望むところである、併し死ぬることも出来ねば殺して呉れるものもない。

そして食べる子規。『仰臥漫録』（明治三十四年九月二十一日の記）より。

朝 スク飯三碗 佃煮 梅干 牛乳一合コッ
ア入 菓子パン 塩センベイ
午 マグロノサシミ 粥ワン ナラ漬 胡桃
煮付 大根モミ 梨一ツ
便通
間食 餅菓子一二箇 菓子パン 塩センベイ
渋茶
食過ノタメカ苦シ
晩 キスノ魚田二尾 フキナマス二碗 ナラ
漬 サシミノ残り 粥三碗 梨一ツ 葡
萄一房

胃は丈夫であつたので、食欲はあつたのであろう。母と妹律の子規への献身ぶりもこの献立から想像できる。午に「便通」があつたことをここに記していることはいかにも子規らしい。朝の「牛乳一合コッア入」、間食での「食過ノタメカ苦シ」、晩の「サシミノ残り」

の記述には、「小園の図」に配置せられた俳句のように飾り気がなく、それがかえって子規の日常を彷彿とさせる。

書く子規。帝国大学を中退して、日本新聞社の「日本」へ連載する。連載は三十六歳で死を迎えるまで続くこととなる。書くことが生活の糧であつたとしても、病床生活の子規にとって、書くことは生きることであつた。子規の書いた原稿が新聞に載る。それを読む。そのことが、自身の一日一日の「生」を確かめることであつたに違いない。

死はいつも子規のそばにあつた。それにもかかわらず、目に触れたもの、音に聴いたもの、そして心中に浮かんできたものに向き合つて、書き綴つていく子規をとり上げてみる。

『墨汁一滴』で、明治三十四年四月三日に八日間続いた「明星」の批評が終わる。四日は室内の張子の亀やお多福、大黒、恵比寿、福助などの置物に足が生えて、病床のぐるりを歩きだしたら面白いな、と空想に楽しんでいる。五日には蓄音機で西洋の笑歌を聞く。子規は

勝手にこの歌を「鶏が五六羽飛んで来て、権兵衛の頭に糞かけた、アッハハ、ハッハ、フッハハハ」と聞いて楽しんでいる。六日は陸奥宗光の話。七日は全部抜き出してみる。

此頃は左の肺でブツ　く　く　く
といふ音が絶えず聞える。これは「佛々々々」と不平を鳴らして居るのであらうか。或は「佛々々々」と念佛を唱へているのであらうか。或は「物々々々」と唯物説でも主張して居るのであらうか。　（七日）
肺の内から音が聞こえてきても、このように話を展開していく子規に、言葉に出来ない迫力を感じるのは、私だけではないと思うのだが。八日は子供の時は弱味噺で泣き味噺だつた話。翌九日には

一人間一匹

右返上申候但時々幽霊となつて出られ得る様以特別御取計可被下候也

明治三十四年月日

何がし

地水火風御中

（九日）

とある。一休和尚の『拝借申す 四大五蘊

お返し申す 今月今日』をもじったのかどうかは不明だが、人間一匹返上したいと言いつつ、幽霊となって出られるよう特別に取り計らって下され、と書くところにいかにも子規たるものがある。一方、『病床六尺』で

余は今迄禪宗の所謂悟りといふ事を誤解して居た。悟りといふ事は如何なる場合にも平気で死ぬる事かと思つて居たのは間違ひで、悟りといふ事は如何なる場合にも平気で生きて居る事であつた。

と記す。子規の生きざまからでてきた言葉である。さて絶筆は

糸瓜咲て痰のつまりし仏かな
痰一斗糸瓜の水も間にあはず
をと、ひのへちまの水も取らざりき

辞世が三句というのも子規らしい。明治三十五年九月十九日没す。三十六歳。子規の庭には鶏頭が咲いていたであらう。

快適な環境を創造する

鹿島

KAJIMA CORPORATION

代表取締役社長 梅田 貞夫

本社 ● 東京都港区元赤坂1丁目2番7号

電話 ● 東京03(3404)3311(代)

平成九年
謹賀新年

総本山知恩院門跡第八十六世
浄土門主

中村康隆

大本山増上寺
法主

藤堂恭俊

大本山金戒光明寺
法主

坪井俊映

大本山百萬遍知恩寺
法主

大野忍敬

大本山清浄華院
法主

江藤澄賢

大本山光明寺
法主

戸松啓真

大本山善光寺大本願
法主

一條智光

法然上人御降誕地廿五霊場第一番
中国二十三観音特別霊場
中国二十地蔵尊霊場第一番

誕生寺

〒709-36 岡山県久米郡久米南町里方八〇八
〒 電話(〇八六七二) 八一二二〇二

浄土宗宗務総長

成田有恒

〒154 世田谷区世田谷四一七一九

大吉寺

平成九年
謹賀新年

浄土宗教学局長

袖山榮眞

大正大学
理事長

大田秀三

学校法人 大乘淑徳学園
淑徳大学・淑徳短期大学
理事長

長谷川良昭

〒174 東京都板橋区前野町五―五―二

京都文教大学
京都文教短期大学

学長 大河内良孝

〒611 宇治市模島町80
☎(〇七七四)二三―三二二

芝学園
理事長

真野龍海

東京都港区芝公園
一―三―十六 天光院

宗会議員
長崎 九品院

小田義海

和歌山・西念寺
住職

武田裔彦

〒642 海南市阪井466

大願寺住職
宗会議員

神谷英敏

〒042 北海道函館市銭亀町101

伊勢教区松阪組
樹敬寺

住職 山下法文

平成九年
謹賀新年

神奈川教区長

森 爽 海

鎌倉市材木座六一七七―十九

浄土宗東京教区教区長
光取寺住職

大室了 皓

〒141 東京都品川区上大崎一―五―十
電話〇三(三四四一)八三八四

総本山知恩院

おてつき 運動推進部長

東海林 良雲

塩釜市雲上寺

弘経寺住職

金田進 徳

取手市白山二―九―二八

〒142 東京都文京区小石川三丁目十四番六号

無量山

傳通院

電話(〇三)三八一四―三七〇一(代表)
振替東京六〇九三番

〒365 鴻巣市本町八―二―三十一

勝願寺

電話〇四八五―四一―〇二二七
藤田 得三

お寺は皆さんの相談所
浄心寺

小池政 雄

〒113 文京区向丘二―十七―四

大松 寺

酒井亮 貫

〒108 東京都港区三田四―一―三八
電話(〇三)三四五一―二四九四

浄土宗梅窓院住職

中島真 成

〒107 東京都港区南青山二―二六―三
電話〇三(三四〇四)八四四七

平成九年
謹賀新年

貞松院住職

山田和雄

〒392 諏訪市諏訪二一十六―二一

光円寺住職

佐藤良純

112 文京区小石川四―十二―八

函館

称名寺

040 函館市船見町十八―十四
電話〇一三八(二三三)〇五七四

晴雲寺住職

塚田弘導

〒254 平塚市立野町六一五
電話 〇四六三(三三一)二六三八

鎌倉大仏殿 高德院

住職 佐藤密雄

〒248 鎌倉市長谷四―二―二八
電話(〇四六七)二二一〇七〇三
FAX(〇四六七)二二一五〇五一

横浜 大光院

宮林昭彦

明顕山 祐天寺

住職 本多正雄

副住職 巖谷勝正

〒453 東京都目黒区中目黒五―二四―五三
電話(〇三三)三七二二一〇八一九

願行寺住職

佐藤成順

〒140 品川区南品川二―一―五

お寺は生きているうちに行くところ
ナムアマミダブツのお寺

住職 樋口隆信

副住職 樋口伸生

〒986 宮城県石巻市門脇町二―五―七西光寺
電話(〇二二五)二二二―二二六四

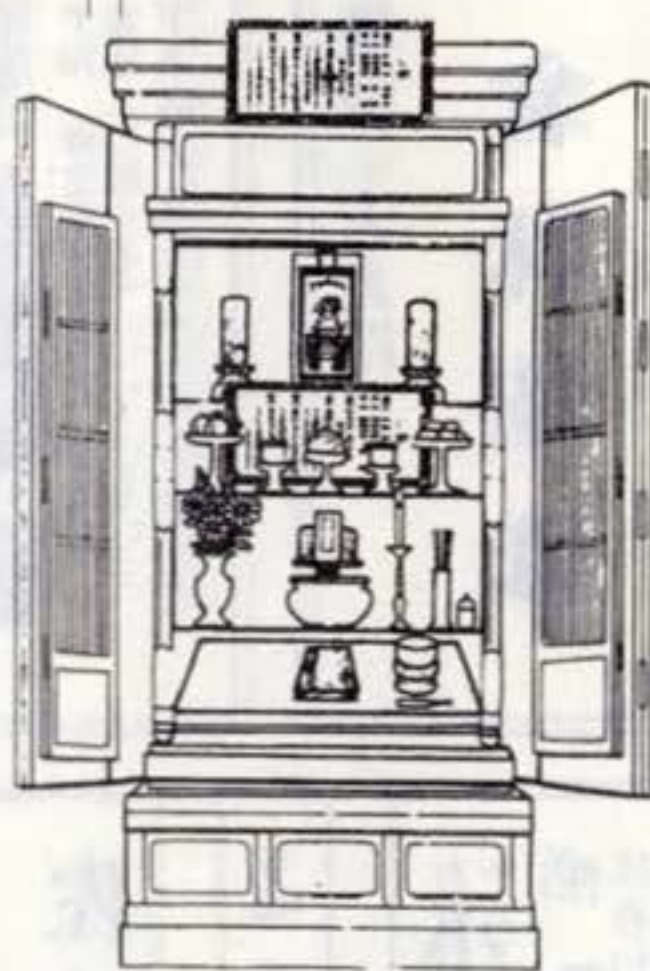
好評
発売中
!!

お寺から檀信徒へ

宗旨布教額

家の仏壇の上に掛けるものです。
菩提寺とその宗旨がいつも
ひと目で明確になります。

数をまとめて御注文下さい。



定価：大（32.0×18.3cm）721円／小（27.3×14.2cm）412円

注文・問合せは

法然上人鑽仰会

〒105 東京都港区芝公園4-7-4明照会館内

電話：03-3578-6947／FAX：03-3578-7036



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では読者の自由な参加をお待ちしています。
詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、
TVウォッチング、紀行文その他創作等。
あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

誌上俳壇

俳壇
花苑中
//

父の書の折られしページ秋灯下

青北風や屈みて縄文遺跡掘る

笙の音に昏れゆく冬の増上寺

影薄く水子地藏に冬陽落つ

吉田ゆきゑ（東京都江戸川区）

佐藤雅子（山形県上山市）

ありがたさに

宇高一慧（埼玉県上尾市）

みめぐみのありがたさに

手を合すとき その手には

花の蕾の如 希望の宿る

こゝろよりの念佛は

この人の世にまことの情を

英知の花をかざさしむる

幸あれと光さやかに

おわすみほとけ

吉野法衣店

各大本山御用達浄土宗袈裟法衣専門



〒160 東京都新宿区南元町17
TEL 03-3335-2168
振替 東京21176372

事務局便り

事務局便り

●J・FORUM（浄土フォーラム）

ご好評を頂いております、皆様のためのコーナー（J・FORUM）。毎月、投句、投稿を頂いておりますが、編集部ではもっともっとたくさん作品を、お待ちしております。短歌や俳句、書評随筆や詩、身近な出来事や情報など、先の要領でほとんどご応募ください。私たち編集部では、読者の皆さんと一緒に、この「浄土」をより楽しく、すばらしいものにしていきたいと考えております。

- 1 随筆・歌など……四百字詰め原稿用紙十枚以内
- 2 俳句・短歌・川柳など……二首まで
- 3 その他、本誌の体裁や掲載記事に対するご意見やご感想など、何なりと気軽に聞かせ下さい。

……適宜

タイトルは自由です。投稿は随時受け付けておりますが、採否に関しては編集部にご一任下さい。また、原稿は返却いたしませんので必ずコピーをおとりの上お送り下さい。採用分については記念品を進呈いたします。

●読者アンケートのお願い

編集部では「浄土」のより一層の充実を図るために、皆様にアンケートをお願いしております。

1 十二月号でもっともよかった記事。

2 今後、掲載してもらいたい記事、希望する内容。

3 法然上人鑽仰会の活動として望むこと。

4 その他。ご意見、ご感想など。官製はがきまたはFAXで事務局までお送り下さい。もれなく記念品を差し上げます。どうぞご協力お願いします。（住所、氏名、電話番号をお忘れなく）

●新規会員紹介

購読会員

東京	品川区	元吉宏明
長崎	南松浦郡	中村醇四郎
長崎	南松浦郡	永田廣八

年末年始休所のお知らせ

十二月二十七日より一月七日まで休所させていただきます。



初詣祈り迷いし犬の後

岱潤

年の初め仏さまをお参りするとき、今年は何をお祈りしようかと、迷ったことを思い出した。そしてその思いの中で、四月号のグラビアで紹介した、仙台の定義如来をお参りしたときのことを思い出した。定義如来は一生に一度だけ、その人のお願い事をかなえてくれる仏さまだったからだ。定義如来の前に立ったときは、しばらく考えてしまったものである。

新しい年は何をお祈りしようか、そんなことを考えて犬と散歩をしていると、その時の臭いだけで歩いてゆく犬の後に、振り回されながらついきゆくことになってしまふ。何とも哀れな姿だ。

そもそも祈るもの、願うものが何かによって、その人の人間性、生き方が出てしまうものである。また逆にその祈ること、願うことを清らかにしてゆくことで、その人の人間性が高められてゆくような気もする。

そう考えてゆくと初詣に祈ることは、初めから決まっているようである。人の不幸や時間の逆転は祈れないのである。つまりその逆、人々の幸福を祈ること、これが仏さまが私たちに望んでいる祈りであるだろう。

今年の表紙は、「燈台」を専門に撮り続けている写真家の岡克己氏にお願いした。『浄土』誌が、現代の精神世界に輝く燈台ならんと精進してゆく、編集部一同の志を読み取って頂ければありがたく思う。

今年もまた、よろしくお願い申し上げる。

(長)

編集チーフ

長谷川岱潤

編集スタッフ

斎藤晃道

村田洋一

小村正孝

石上俊教

佐山哲郎

編集協力

オフィス頼伽代表

編集顧問

大室了皓

浄土

六十三巻一月号 頒価六百元
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷——平成八年十二月二十五日

発行——平成九年一月一日

編集人——宮林昭彦

印刷所——株式会社 平文社

写真植字——株式会社 シータイイー

〒一〇五 東京都港区芝公園四一七一四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話〇三(三五七八)六九四七

FAX〇三(三五七八)七〇三六



夏だ。冬だ。は。ど。は。

冬だ。寒くても、雪にまみれても、暖かさはアツイ。
アツイから、漏れている。
スポーツの汗、火の熱、恋の汗……
冬が来ても、夏みたいカラッカラの僕のノットに、冬物語。
スカッとした爽快な味か、雪のようにノットをすべる。
カラタが、シンとうるおっついていく。
冬だけの生ビールサッポロ 冬物語。今年も運慶と登壇。
さあ今年は、誰と、どんな物語？



SAPPORO
冬物語

THE WINTER'S TALE

サッポロビール株式会社

ビールは、20歳になってから。あきかんはリサイクルへ。

ご協力お願い：自動販売機による酒類の販売は午後11時から午前5時まで停止されています。



Cima, Cima.



ここにニッサンの最高があります。新しいシーマ

シーマがあることで、あなたの生活にどんな感動と満足が生まれるだろうか。私たちは今、大きな自信を持って話せます。技術を注ぎ、性能に妥協せず、あらゆる状況で、「これぞシーマ」の乗り心地を楽しんでいただけると。あなたがクルマに理想として求めてきたことが、こんどのシーマに実現できた。すみずみまで「ニッサンの最高」にふさわしい仕上がり。風格と躍動感。ひとたび走り始めれば、そこにはもっと深い歓びが待っています。シーマノシーマノあなたの熱い賞賛の声が聴こえそうです。日本車初。全車、SRSサイドエアバッグ標準装備。運転席・助手席に装着。側面衝突時の胸部に加わる衝撃を緩和します。大きく進化した4.1ℓ V8エンジン搭載。シーマのために開発。優越感あふれるスペックが、滑らかで力強い加速を生みます。



Photo: シーマ41LV ボディカラー ダークブルー・イッシュブラックツートーン(1P)(#4S9・特別塗装色) 本革シートはメーカーオプション ●全長4970×全幅1820×全高1445(mm) ●エンジンV8 4130cc TWINCAM ●最高出力270ps/5600rpm(ネット値) ●最大トルク38.4kgm/4000rpm ●運転席・助手席SRSサイドエアバッグ ●デュアルエアバッグ(運転席・助手席SRSエアバッグ) ●ABS(ブレーキロック抑制システム) ●V-TCS ●AVシステム(TV機能付) ●運転席オートドライビングポジションシート ※一部車種に搭載。シーマのお求めは、お近くのローレル・スカイライン専販売店へ。

スピードおさえて、いい運転。
シートベルトをしめましょう。

LIFE TOGETHER
NISSAN

人間のやさしさをクルマに。